

親子相互交流療法が子どもと養育者の肯定的な対人相互作用の 促進に及ぼす効果

関西学院大学大学院文学研究科・日本学術振興会特別研究員*1 金山裕望

関西学院大学大学院文学研究科・日本学術振興会特別研究員*2 水崎優希

Effects of Parent-Child Interaction Therapy for positive Interaction

Kwansei Gakuin University, Japan Research Fellow of Japan Society for the Promotion of Science,

KANAYAMA, Yumi

Kwansei Gakuin University, Japan Research Fellow of Japan Society for the Promotion of Science,

MIZUSAKI, Yuki

要約

親子相互交流療法（Parent-Child Interaction Therapy: PCIT）が親子の対人相互作用に与える影響を明らかにした先行研究はほとんど存在しない。そこで本研究では、2組の親子にPCITを適用し、子どもの行動と対人相互作用の変化を明らかにすることとした。子どもの行動は肯定的で言語を伴う行動、肯定的で言語を伴わない行動、否定的で言語を伴う行動、否定的で言語を伴わない行動の4つに評定した。養育者の行動はDPICS-IV（Eyberg et al., 2013）を用いて評定した。その結果、PCITを実施することで、子どもの肯定的な行動（言語を伴う、伴わない）の割合は大きいまま維持するが、言語を伴わない肯定的な行動の割合が大きくなることが示唆された。また対人相互作用の変化は、親子間で異なることが示唆された。

【キー・ワード】 親子相互交流療法, 遊び, 対人相互作用

Abstract

Parent-Child Interaction Therapy (PCIT) is an evidence-based behavioral parent training program conducted through direct coaching by therapists in play situations (McNeil & Humberg-Kigin, 2010). Previous studies suggest that PCIT increased the mothers' use of positive parenting skills in play situations. However, these studies have not focused on mother-child interactions. This study, therefore, investigated the efficacy of PCIT in the functional relationship between the mother's and child's behaviors. The participants were two pairs of mother and child. After PCIT,

*1 現所属：志學館大学人間関係学部

*2 現所属：長岡こども・医療・介護専門学校

the rate of the children's positive behavior increased without speaking, and children's negative behavior decreased. In addition, interaction data suggested that one mother's positive interaction skills increased the child's positive behavior without speaking. Still, the other mother's skills didn't appear to increase the child's positive behavior. These findings imply that PCIT increases the positive behavior of mother and child. However, future studies are needed to examine the changes in parent-child interactions.

【Key words】 Parent-Child Interaction Therapy, play, mother-child interaction

問題と目的

遊びにおいて子どもは他者との関わり方を学んでいく。子どもは他者とおもちゃを共有したり、役割分担をしたり、感情を共有することで、遊ぶことが可能になる。おもちゃや他者といった物理的、対人的な環境と関わりを持つことは、心身の調和のとれた発達の基礎となる（野尻, 2015a）。子どもが遊びを行う際には、遊びに取り組むことを支えられるような大人と子どもの安定した関係が重要である（野尻, 2015b）。そのため大人と子どもの関係性が重要な役割を占めると考えられる。

子どもと養育者の関わりを支援する必要性が指摘されている。近年、幼児の遊ぶ相手は養育者であることが多いが（ベネッセ教育総合研究所, 2010）、養育者の中には育児ストレスを感じることも指摘されている。育児ストレスに有効性が示された心理療法として、親子相互交流療法（Parent Child Interaction Therapy: PCIT）が挙げられる。PCIT は子どもの問題行動の低減や養育者の肯定的な行動の増加に有効性が示されている（たとえば Bagner & Eyberg, 2007; Ward, et al., 2016）。その特徴として、養育者が遊びの中で子どもに関わる行動を実践すること、養育者はこれらの行動を身につけるために、セラピストが養育者と子どもとの遊び場を観察し、その場でフィードバック（コーチング）を実施することが挙げられる（McNeil, & Hembree-Kigin, 2010）。

その一方で、PCIT が親子の肯定的な対人相互作用に及ぼす効果を検証した先行研究は限られている。たとえば Bagner & Eyberg (2007) は子どもが養育者の指示に従ったことを行動観察データとして収集したが、養育者が指示を出していない場面での子どもの行動を明らかにしていない。このような課題を踏まえ Hakman et al. (2009) は、指示を出していない場面も含めて子どもの行動を観察し、PCIT を通して子どもの肯定的な行動が増加することを報告している。しかし子どもの肯定的な行動の幅が広く（例：一人で黙って遊ぶ、養育者と会話する）、また介入前後の比較を行っていない。以上のことから PCIT 実施前後で子どもと養育者との肯定的な対人相互作用が変化するかを十分に示すことができていない。

そこで本研究では、子どもへの関わりとしに困難を感じている養育者とその子どもに PCIT を適用し PCIT 実施前後で子どもの肯定的な行動および肯定的な対人相互作用が変化するかを明らかにすることを目的とした。

方 法

対象者

本研究の対象基準は、①親子の対人相互作用に困難が示されること、②子どもの年齢が2歳以上7歳未満であること、③新版K式発達検査2001によって子どもの言語理解が2歳以上であることが示される、もしくは3語文以上の発話があること、であった。その結果、2組の親子が参加することとなった。1組目の親子（以下、case 1）の母親の年齢は37歳、子どもは女兒で年齢は3歳10カ月であった。Case 1の女兒の新版K式発達検査の結果は、全領域指数113（認知適応指数：115、言語社会指数：113）であった。主訴は不登校の姉のことで我慢させることが多く、ストレスを感じて夜泣きや歯ぎしりが起こっており、子どもへの関わり方を知りたいというものであった。2組目の親子（以下、Case 2）の母親の年齢は37歳、子どもは男児で年齢は4歳11カ月であった。Case 2の男児の新版K式発達検査の結果は、全領域指数106（認知適応指数：109、言語社会指数：102）であった。主訴は思い通りに行かないとかんしゃくを起こし、家族のいうことを聞かなかつたり、友だちを威嚇したり、手が出る子どもが怒りのコントロールをできるようにしたいというものであった。なおいずれの参加者もPCITの修了基準¹を満たし、PCITを修了した。

手続き

本研究は関西学院大学「人を対象とする行動学系研究倫理委員会」の承認を受けた（承認番号：2019-38）。近隣施設および関西学院大学心理科学実践センターのHPに募集要項を記載したチラシを掲載し、対象者を募集した。チラシにはQRコードを記載し、QRコードを読み取るとQualtricsで作成した応募フォームへ転送される仕組みとなっていた。応募フォームに記入された連絡先に研究者が返信し、関西学院大学の心理科学実践センターのプレイルームに入室してもらった。プレイルームは、親子が遊ぶためのワンウェイミラーのついた部屋、タイムアウト部屋、カメラ等の設備が整っていた。このプレイルームを使用し、PCITを実施した。PCITを実施したのは、公認心理師と臨床心理士の資格を有し、PCIT Internationalが認める所定の研修を修了したセラピスト2名であり、スーパービジョンを受けながらPCITを実施した。行動観察はPCIT実施前後に3つの場面（子ども指向相互交流、親指向相互交流、お片付け）において実施した。子ども主導の遊び（Child Led Play：CLP）においては、親は子どものリードに従って遊び、子どもにおもちゃを自由に選ばせるよう指示を受け、その後親子で遊びを実施する（Eyberg & Funderburg, 2011）。親主導の遊び（Parent Led Play：PLP）においては、親は子どもをリードして親が選んだ遊びを行うよう指示を受ける（Eyberg & Funderburg, 2011）。お片付け（Clean Up：CU）においては、親は子ども一人におもちゃを片付けさせるよう指示を受ける（Eyberg & Funderburg, 2011）。これらの場面について、PCIT実施前後に各参加者に計6つの場面、合計12場面が観察対象となった。

¹修了基準は、子どもの問題行動の頻度が下がること、養育者がPCITで指定されたスキルを獲得することと育児に自信を持つことの3つである（Eyberg & Funderburg, 2011）

行動指標

(1) 子どもの行動指標

Hakman et al. (2009) を参考にし、子どもの行動指標を作成した (表 1)。子どもの行動を肯定か否定、発話の有無の二次元で分類し、4 つの行動指標を作成した。(肯定的で言語を伴う行動: 肯定的_言語あり, 肯定的で言語を伴わない行動: 肯定的_言語なし, 否定的で言語を伴う行動: 否定的_言語あり, 否定的で言語を伴わない行動: 否定的_言語なし)。各行動指標の概要と例を表 1 に示した。

表 1 子どもの行動コードの概要と例

行動指標	概要	例
肯定的_言語あり	遊び場において生じる肯定的な行動のうち、言語を伴うもの	お礼を言う、自分のおもちゃを説明する、うなづく、養育者の指示に従う
肯定的_言語なし	遊び場において生じる肯定的な行動のうち、言語を伴わないもの	おもちゃを使って遊ぶ
否定的_言語あり	遊び場において生じる不承諾および不適切な行動のうち、言語を伴うもの	駄々をこねる、暴言を吐く、文句を言う
否定的_言語なし	遊び場において生じる不承諾および不適切な行動のうち、言語を伴わないもの	養育者をたたく、養育者の指示を無視しておもちゃを使って遊ぶ

(2) Dyadic Parent-Child Interaction Coding System-Forth Edition (DPICS-IV; Eyberg, et al., 2013)

親子の相互交流を評定するための行動観察評定尺度である。本研究では養育者の行動指標である、行動の説明、繰り返し、具体的賞賛、質問、間接的命令、直接的命令、否定的会話、中立的会話、一般的賞賛を使用した。各行動の概要と例を表 2 に示した (表 2)。CLP においては、具体的な賞賛、繰り返し、行動の説明を各 10 回以上に増やすことが求められ、質問、間接的命令、直接的命令、否定的会話は 3 回未満に減らすことが求められる。PLP と CU では直接的命令を行った後に子どもが命令に従えば具体的賞賛を行うことが求められる (Eyberg & Funderburg, 2011)。これらの行動を Hakman et al. (2009) と同様に、各場面において増やすことが求められる行動を肯定的な行動とし、減らすことが求められる行動を否定的な行動とした。

観察者は PCIT を実施したセラピスト 2 名であり、観察の信頼性は全 12 回のうち 3 回 (24%) について測定した。養育者の指標についての一致率は 81%、子どもの指標についての一致率は 78% であった。

なお、養育者の肯定的な行動に子どもの肯定的な行動が後続したものを肯定的な対人相互作用、養育者の否定的な行動に子どもの否定的な行動が後続したものを否定的な対人相互作用と定義した。

表 2 養育者の行動指標の概要と具体例

行動指標	スキルの説明	具体例
具体的賞賛	子どもの適切な行動に言及したうえで子どもを賞賛する発言	「素敵な色を選んだね」「ペンを大事に使っているね」
繰り返し	子どもの適切な発言を繰り返す発言	子ども「大きな城ができた」養育者「大きな城ができたね」
行動の説明	子どもが行っている適切な行動を説明する発言	(子どもがリンゴを描いている) 養育者「～はリンゴを描いています」
一般的賞賛	子どもの適切な行動に言及せずに子どもを賞賛する発言	「すごいね」
中立的会話	上記の行動のいずれにも当てはまらない発言	「うん」「そうだね」
質問	子どもからの回答を求める発言	「この鳥はなんて鳴くの？」
間接的命令	子どもがすべきことを指示する発言	「ここに座りなさい」
直接的命令	子どもがすべきことを提案する発言	「ここに座ってくれるかな？」
否定的会話	子どもの活動に対する否定的または反対の発言	「もっときれいに塗れたらよかったのにね」

Eyberg & Funderburk (2011 加茂訳 2013) , 國吉・須藤(2016)を元に作成

PCIT の概略

PCITは、「Parent-Child Interaction Therapy プロトコル 2011 日本語版ドラフト ver1.0(Eyberg & Funderburg, 2011: 加茂(訳) (2011)」の実施手順に従って実施した。PCITは、親子の関係性における温かさを育む CDI と、一貫性がある限界設定としつけの方法を展開していく PDI という第二段階形式を用いる(小平, 2019)。いずれの段階においても、プレイルームの中で親子に遊んでもらい、セラピストは隣の観察室から、ワンウェイミラーまたはモニターで親子を観察し、トランシーバーを介して直接親にフィードバック(コーチング)を行っていく(細金, 2018)。コーチングを通して、CDIで設けられた基準を達成すれば、次のPDIへ進む。PDIに進んだのちに、子どもの問題行動の頻度が下がること、養育者がPCITで指定されたスキルを獲得することと育児に自信を持つことの3つの修了基準を満たすと、PCITは修了した(Eyberg & Funderburg, 2011)。

分析方法

相互作用を明らかにするために、養育者の行動と後続する子どもの行動を行動の連鎖として捉えなおし、逐次分析を適用した。逐次分析では、観察された行動の連鎖が期待される行動の連鎖との差である調整済み残差(Z)を算出する(Bakeman and Quera, 2011)。Zが正の値であれば観察された行動の連鎖が生じやすく、Zが負の値であれば観察された行動の連鎖が生じにくいことを意味している(Bakeman and Quera, 2011)。逐次分析を実施するにあたり、専用のアプリケーションであるGSEQ Version 5.1 (<http://www.ub.edu/gcai/gseq/index.html>)を用いた。

結 果

子どもの行動の変化

Case 1 の子どもの行動の割合を図 1, Case 2 の子どもの行動の割合を図 2 に示す。主な結果として, PCIT 実施後に否定的_言語ありとなしの割合が小さくなり, 肯定的_言語ありとなしの割合が大きくなっていった。しかし肯定的_言語ありとなしのどちらの割合が大きいのかは参加者によって異なっていた。

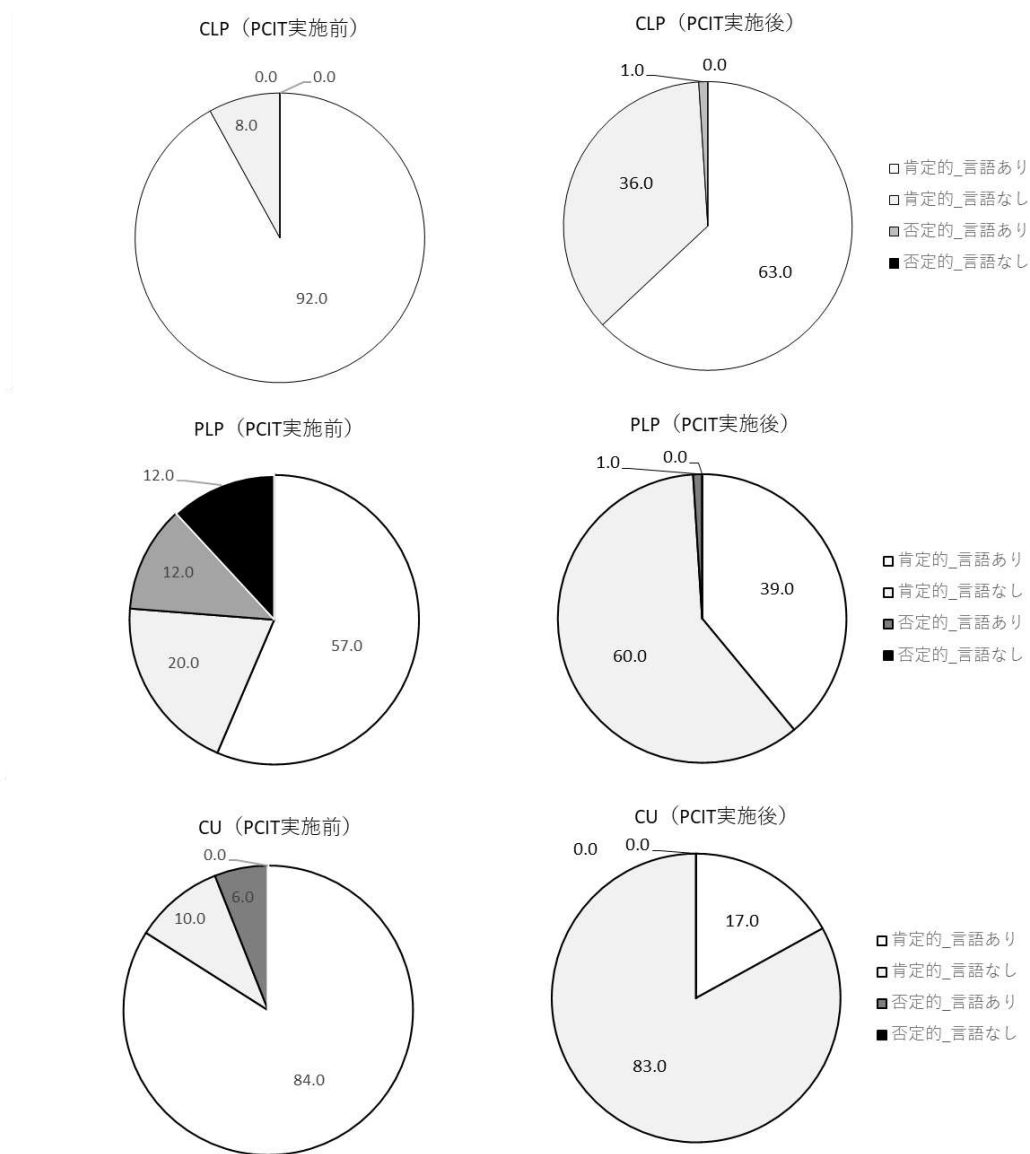


図 1 Case 1 の子どもの行動が生じた割合 (%)

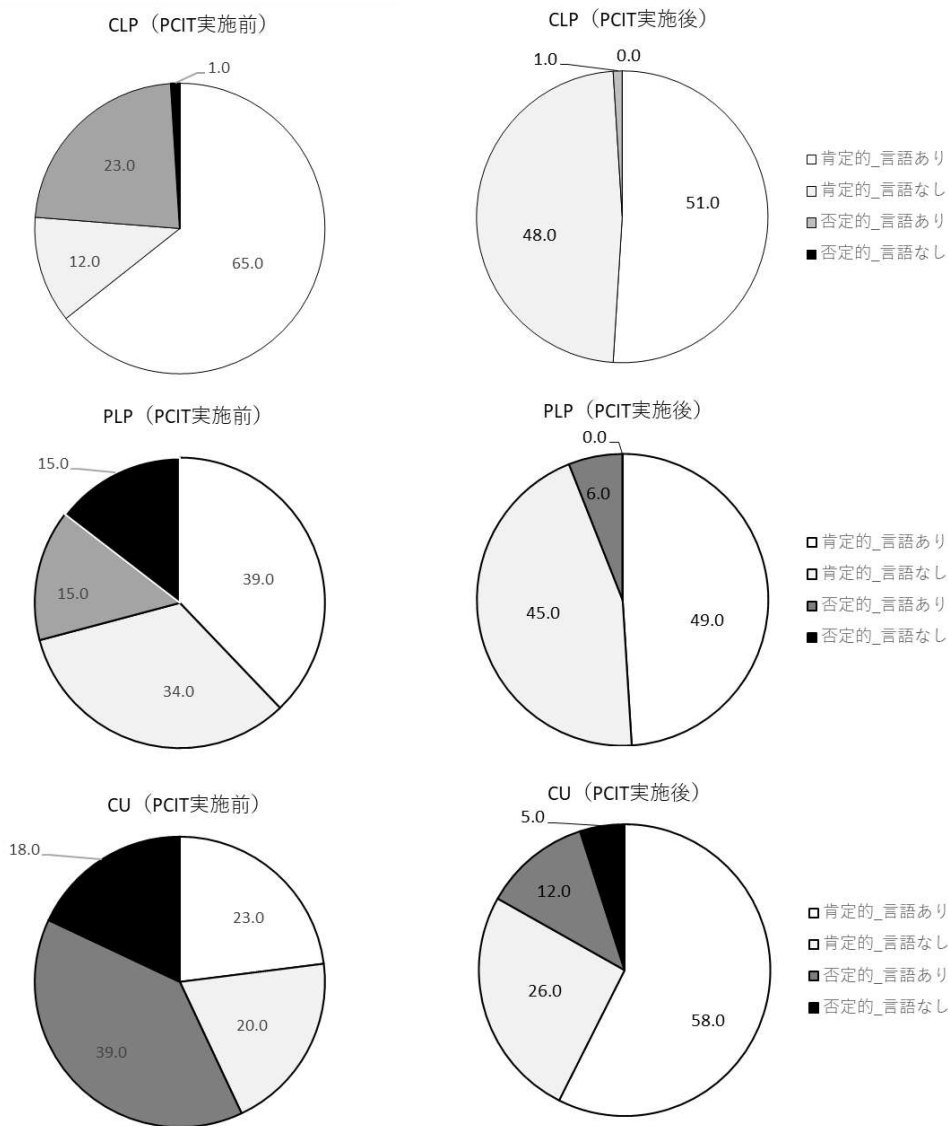


図2 Case 2 の子どもの行動が生じた割合 (%)

親子の相互作用の変化

Case 1 の親子の相互作用の生じやすさを表 3 に示し、主な結果を記述する。PCIT 実施前の CLP においては生じやすい肯定および否定的な対人相互作用は示されなかった。PCIT 実施後の CLP においては、養育者の行動の説明と具体的賞賛に後続して子どもの肯定的_言語なしが生じやすかった (行動の説明の $Z = 2.33, p < .05$; 具体的賞賛の $Z = -1.78, p < .10$)。PLP において PCIT 実施前後に生じやすい肯定的な対人相互作用が示された。具体的には、養育者の繰り返しに後続して子どもの肯定的_言語なしが生じやすかった ($Z = 2.5, p < .01$)。PCIT 実施後は、養育者の行動の説明に後続

表 3 case 1 の親子における相互作用の生じやすさ

	CDI (PCIT実施前)				CDI (PCIT実施後)			
	肯定的_言語あり	肯定的_言語なし	否定的_言語あり	否定的_言語なし	肯定的_言語あり	肯定的_言語なし	否定的_言語あり	否定的_言語なし
行動の説明	0	0	0	0	-2.18 *	2.33 *	-0.55	0
繰り返し	0.08	-0.08	0	0	-0.46	0.02	1.84 †	0
具体的賞賛	0	0	0	0	-1.78 †	1.92 †	-0.49	0
中立的会話	-1.19	1.19	0	0	3.18 **	-3.05 **	-0.65	0
一般的賞賛	-3.06 **	3.06 **	0	0	1.56	-1.51	-0.24	0
質問	1.75 †	-1.75 †	0	0	0	0	0	0
間接的命令	0.33	-0.33	0	0	0	0	0	0
直接的命令	0	0	0	0	0	0	0	0
否定的会話	0	0	0	0	0	0	0	0

	PDI (PCIT実施前)				PDI (PCIT実施後)			
	肯定的_言語あり	肯定的_言語なし	否定的_言語あり	否定的_言語なし	肯定的_言語あり	肯定的_言語なし	否定的_言語あり	否定的_言語なし
行動の説明	0	0	0	0	-2.82 **	2.43 *	1.7 †	0
繰り返し	-1.82 †	2.5 **	-0.11	-0.21	-1.27	1.35	-0.43	0
具体的賞賛	0	0	0	0	3.94 **	-3.82 **	-0.45	0
中立的会話	-1.25	1.57	0.1	-0.13	-1.29	1.42	-0.59	0
一般的賞賛	-0.2	1.07	-0.5	-0.53	-1.16	1.21	-0.28	0
質問	2.14 †	-2.1 †	0.1	-0.77	1.26	-1.23	-0.11	0
間接的命令	-0.79	0	0.66	0.56	1.8 †	-1.75 †	-0.16	0
直接的命令	0.88	-1.67	-0.11	0.82	2.89 **	-2.82 **	-0.25	0
否定的会話	0.34	-0.88	-0.62	1.15	0	0	0	0

	CU(PCIT実施前)				CU (PCIT実施後)			
	肯定的_言語あり	肯定的_言語なし	否定的_言語あり	否定的_言語なし	肯定的_言語あり	肯定的_言語なし	否定的_言語あり	否定的_言語なし
行動の説明	0	0	0	0	-0.35	0.35	0	0
繰り返し	1.54	-1.14	-0.91	0	-0.7	0.7	0	0
具体的賞賛	0	0	0	0	-1.22	1.22	0	0
中立的会話	0.18	0.3	-0.63	0	0.7	-0.7	0	0
一般的賞賛	-0.68	1.5	-0.79	0	1.07	-1.07	0	0
質問	1.23	-0.91	-0.73	0	0	0	0	0
間接的命令	-1.62 †	-0.74	3.29 †	0	-0.4	0.4	0	0
直接的命令	0	0	0	0	0.47	-0.47	0	0
否定的会話	-1.62 †	0.88	1.35	0	0	0	0	0

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

して肯定的_言語なしと ($Z = 2.43, p < .05$), 養育者の具体的な賞賛に後続して肯定的_言語あり ($Z = 3.94, p < .01$), 直接的命令に後続して肯定的_言語ありが生じやすかった ($Z = 2.89, p < .01$)。CU において PCIT 実施前は生じやすい肯定的な対人相互作用は示されず, 否定的な対人相互作用が生じやすいことが示された。具体的には, 養育者の間接的命令に後続して子どもの否定的_言語ありが生じやすかった ($Z = 3.29, p < .01$)。PCIT 実施後は生じやすい肯定的および否定的な対人相互作用は示されなかった。

Case 2 の親子の相互作用の生じやすさを表 4 に示す。主な結果を以下に示す。Case 2 の親子については, CLP において PCIT 実施前は生じやすい肯定的な対人相互作用は示されず, 否定的な対人相互作用が生じやすいことが示された。具体的には, 養育者の直接的命令と否定的な会話に後続して否定的_言語ありが生じやすかった (直接的命令の $Z = 1.93, p < .10$, 否定的な会話の $Z = 3.31, p < .01$)。PCIT 実施後は生じやすい肯定的および否定的な対人相互作用は示されなかった。PLP においては PCIT 実施前は生じやすい否定的な対人相互作用が示された。具体的には, 直接的命令に後続して否

表 4 case 2 の親子における相互作用の生じやすさ

	CDI (PCIT実施前)				CDI (PCIT実施後)				
	肯定的_言語あり	肯定的_言語なし	否定的_言語あり	否定的_言語なし	肯定的_言語あり	肯定的_言語なし	否定的_言語あり	否定的_言語なし	
行動の説明	0	0	0	0	行動の説明	-0.66	0.12	2.58 **	0
繰り返し	0.4	0.88	-1.08	-0.25	繰り返し	0.5	-0.41	-0.46	0
具体的賞賛	0	0	0	0	具体的賞賛	-0.05	0.15	-0.46	0
中立的会話	0.48	0.52	-0.72	-0.85	中立的会話	-0.3	0.46	-0.76	0
一般的賞賛	1.04	-0.52	-0.75	-0.17	一般的賞賛	0.54	-0.45	-0.43	0
質問	0.99	-0.24	-0.72	-0.85	質問	0	0	0	0
間接的命令	0	0	0	0	間接的命令	0	0	0	0
直接的命令	-1.39	-0.36	1.93 †	-0.12	直接的命令	0	0	0	0
否定的会話	-3.21 **	-0.83	3.31 **	3.63 **	否定的会話	0	0	0	0

	PDI (PCIT実施前)				PDI (PCIT実施後)				
	肯定的_言語あり	肯定的_言語なし	否定的_言語あり	否定的_言語なし	肯定的_言語あり	肯定的_言語なし	否定的_言語あり	否定的_言語なし	
行動の説明	0	0	0	0	行動の説明	0.2	0.2	-0.8	0
繰り返し	1.3	-0.72	-0.43	-0.39	繰り返し	0.23	0.23	-0.91	0
具体的賞賛	0	0	0	0	具体的賞賛	0.57	-0.09	-0.96	0
中立的会話	1.54	-0.89	0.72	-1.74 †	中立的会話	-1.08	-0.15	2.47 **	0
一般的賞賛	0	0	0	0	一般的賞賛	-0.31	0.62	-0.62	0
質問	-0.95	1.65	-2.07 †	1.27	質問	0	0	0	0
間接的命令	0.37	0.49	-0.62	-0.56	間接的命令	0	0	0	0
直接的命令	-1.91 †	-0.98	2.26 †	1.67 †	直接的命令	1.55	-1.24	-0.62	0
否定的会話	0.37	0.49	-0.62	-0.56	否定的会話	-0.94	1.08	-0.27	0

	CU (PCIT実施前)				CU (PCIT実施後)				
	肯定的_言語あり	肯定的_言語なし	否定的_言語あり	否定的_言語なし	肯定的_言語あり	肯定的_言語なし	否定的_言語あり	否定的_言語なし	
行動の説明	0	0	0	0	行動の説明	0	0	0	
繰り返し	1.3	2.5 **	-2.04 †	-1.15	繰り返し	0.51	-0.48	-1.38	1.74 †
具体的賞賛	0	0	0	0	具体的賞賛	0.1	0.09	-0.19	-0.13
中立的会話	-0.26	0.39	-1.25	1.43	中立的会話	-0.42	0.15	0.82	-0.5
一般的賞賛	-0.48	2.13 †	-0.89	-0.5	一般的賞賛	0	0	0	0
質問	-0.45	1.49	-0.37	-0.54	質問	0	0	0	0
間接的命令	-0.43	-1.98 †	1.74 †	0.18	間接的命令	-1.19	-0.61	3 **	-0.23
直接的命令	0.79	-1.42	1.15	-0.82	直接的命令	0.26	0.37	-0.32	-0.91
否定的会話	-0.84	-0.84	0.82	0.61	否定的会話	0	0	0	0

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

定的_言語ありと否定的_言語なしが生じやすかった ($Z = 2.26, p < .05$; $Z = 1.67, p < .10$)。PCIT 実施後は生じやすい肯定的および否定的な対人相互作用は示されなかった。CU において PCIT 実施前は生じやすい肯定的および否定的な対人相互作用が示された。まず肯定的な対人相互作用として繰り返次に後続して肯定的_言語なしが生じやすかった ($Z = 2.5, p < .01$)。次に否定的な対人相互作用として間接的命令に後続して否定的_言語ありが生じやすかった ($Z = 1.74, p < .10$)。PCIT 実施後は生じやすい肯定的な対人相互作用は示されず、生じやすい否定的な対人相互作用が示された。具体的には、間接的命令に後続して否定的_言語ありが生じやすかった ($Z = 3.0, p < .01$)。

考 察

本研究の目的は、養育者とその子どもに PCIT を適用し、遊び場面における対人相互作用に変化を明らかにすることであった。その結果、PCIT 実施後は、子どもの肯定的な行動の割合が大きくなること、子どもの否定的な行動の割合が減少することが示された。また対人相互作用については、PCIT

実施後に肯定的な対人相互作用が生じやすくなった参加者は存在したが、参加者間で一貫した結果が得られなかった。

子どもの行動については、PCIT 実施後において肯定的な行動の割合が大きくなり、肯定的で言語を伴わない行動の割合が大きくなるのが共通していた。そのため、Hakman et al. (2009) と同様に、PCIT は子どもの肯定的な行動を増加させる効果があることを示したといえるだろう。その一方で肯定的な行動のうち、どちらの行動の割合が大きくなるかは参加者間で異なった。このような差が生じた要因として、PCIT 実施前の養育者からの関わりが考えられる。肯定的な言語を伴う行動の割合が小さくなった Case 1 の子どもの発言の大半は、質問への返答であった。そのため PCIT 実施後に養育者の質問が減少したことで、子どもが返答する機会が減り、肯定的で言語を伴う行動の割合が小さくなったと考えられる。また否定的な行動の割合が小さくなったことは、子どもが親の指示に従う頻度が増えることを示した先行研究 (Bagner & Eyberg, 2007) と一致している。

対人相互作用については、PCIT 実施前の肯定的な対人相互作用のうち、養育者の繰り返しに後続して子どもの肯定的な言語を伴う行動が生じやすいことが一致していた。また否定的な対人相互作用のうち間接的命に後続して子どもの否定的な行動が生じやすいことが共通していた。そのため PCIT 実施前は、養育者が繰り返しを行うと遊びに集中し、養育者が間接的命 (提案) すると子どもは反抗することで養育者の指示を無効にしていた可能性が存在する。

PCIT 実施後の対人相互作用の変化は参加者によって異なっていた。Case 1 では肯定的な対人相互作用が生じやすいことが示されたが、Case 2 では同様の結果が得られなかった。具体的には、Case 1 は養育者の具体的賞賛に後続して子どもの肯定的で言語を伴う行動が、養育者の行動の説明に後続して子どもの肯定的で言語を伴わない行動が直接的命に後続して肯定的で言語を伴う行動が生じやすいことが示されたが、Case 2 においては同様の結果は示されなかった。具体的賞賛と行動の説明、および直接的命 (親主導の遊びとお片づけ場面に限る) は PCIT で増やすことが望まれるスキルである (Eyberg, & Funderburk, 2011)。それにも関わらず、Case 1 内においても子どもの後続する行動が異っており、これらの養育者の行動が子どもの行動に与える影響は異なる可能性が存在する。また Case 2 においては生じやすい肯定的な相互作用は示されなかったが、養育者のスキルと子どもの行動の割合は変化していた。そのため、Case 2 の子どもの肯定的な行動は養育者の行動に依存せずに生じた可能性が存在する。

今後の課題として、参加者の数と行動指標が挙げられる。まず参加者の数については、2 組の親子と少なく、親子間で得られたデータの差が大きかった。この差が PCIT の効果にばらつきが大きいことを表しているのか、子どもの個人差が大きいことを表しているのかは明らかになっていない。そのため今後の研究においては、参加者の数を増やし検証することが望まれる。次に行動指標については、感情の大きさを反映できていない。本研究では子どもが「うん」、「ありがとう」、「歌う」のいずれの行動を行っても、同じ肯定的_言語ありと評定したが、肯定的な感情の大きさは異なっていたと考えられる。そのため今後の研究においては、肯定的および否定的の大きさを捉えつつ行動指標に反映させることが必要となるだろう。

引用文献

- Bagner, D. M., & Eyberg, S. M. (2007). Parent–Child Interaction Therapy for Disruptive Behavior in Children with Mental Retardation: A Randomized Controlled Trial. *Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology, 36*, 418-429.
- Bakeman, R., & Quera, V. (2011) Sequential analysis and observational methods for the behavioral sciences. New York, Cambridge university press.
- ベネッセ教育総合研究所 (2010). 第1章幼児の生活 第4回 幼児の生活アンケート・国内調査 報告書 [2010年] (Received from https://berd.benesse.jp/iisedai/ken/research/pdf/research13_8.pdf)
- Eyberg, S. M. et al. (2014) : Japanese version of dyadic parent–child interaction coding system IV (DPICS-IV) (加茂登志子 (訳) (2014) 親子対の相互交流評価システム第IV版日本語版)
- Eyberg, S. M., & Funderburk, B. (2011). *Parent–Child Interaction Therapy Protocol 2011*. Gainesville, FL: PCIT International.
- (加茂登志子 (訳) (2011). Japanese version of *Parent–Child Interaction Therapy Protocol 2011*. PCIT international.)
- Hakman, M., Chaffin, M., Funderburk, B., Silovsky, J. (2009). Change trajectories for parent-child interaction sequences during parent-child interaction therapy for child physical abuse. *Child Abuse & Neglect, 33*, 461-470.
- 細金奈奈 (2018). 発達障害児の母子関係への修正的介入：自閉スペクトラム症の男児と母の親子相互交流療法(PCIT)の治療経過を中心に 精神療法, *44*, 168-174
- 小平かやの (2019). 児童福祉領域における PCIT こころの科学, *206*, 55-58.
- McNeil, C. B., & Hembree-Kigin, T. L. (2010). *Parent-Child Interaction Therapy*. New York: Springer.
- 野尻祐子 (2015a). 遊び 森上史朗・柏女霊峰 (編) 保育用語辞典[第8版] (pp.68) ミネルヴァ書房
- 野尻祐子 (2015b). 自由遊び 森上史朗・柏女霊峰 (編) 保育用語辞典[第8版] (pp.68) ミネルヴァ書房
- Ward, M. A., Theule, J., & Cheung, K. (2016). Parent–Child Interaction Therapy for Child Disruptive Behaviour Disorders: A Meta-analysis. *Child & Youth Care Forum, 45*, 675-690.

謝辞

本研究に参加していただいた親子の皆さま、本研究の実施にご協力いただいた関西学院大学心理学実践センターの先生方、京都教育大学佐藤美幸先生に感謝申し上げます。また本研究を助成いただきました公益財団法人発達科学研究教育センターに感謝申し上げます。

